

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 4号」

ベストピアは小原靖夫の
個人誌です。

平成二十四年四月
第四号

< 2012年4月 >

古賀 順子

「春は桜」

日本の四月は新学期。小中学校の校庭や大学のキャンパスが美しい桜の花に彩られる季節です。フランスの四月は「復活祭」。新学期は九月ですが、パリも四月には桜の花が美しく咲きます。今年パリは三月がとても暖かく、月末にはマロニエの芽が出始め、レンギョウが黄色に輝き、レ・ゼコール通りのコレージュ・ド・フランスの桜が白く開き、近くの公園はピンク色のとても綺麗な桜に縁取られました。

四月一日の日曜日、そんな春に誘われてミリー・ラ・フォレに行きました。パリから高速 A6 を南に走って 1 時間、ジャン・コクトーが永眠しているサン・ブリーズ・デ・サンプル礼拝堂があります。ペストなど、中世の疫病を薬草で治療した聖ブリーズに由来する 12 世紀からの礼拝堂で、敷地内には小さな畑にいろいろな薬草が植えられています。コクトーがミリー・ラ・フォレに家を購入したのが 1947 年、63 年他界するまでの 17 年間愛情を込めて住み続けた町です。礼拝堂の内部には、天まで延びる薬草（両側壁）、猫、茨のキリストと天使たち（正面）がコクトーによって描かれています。スタンドグラスはコクトーのデザインで、ジャン・マレの解説（録音）が訪れる人を温かく迎えてくれます。

自然も人間も生まれ変わる春、その命の源が地下水です。「ベストピア」3月号で紹介されている「地下水放射能汚染と地震」

（江口工）は、「水」の大切さを教えてくれます。普段は考えることのない地下の世界、「水」も「空気」も無限にあるのではなく、地球という閉ざされた空間を巡回していることに気がきます。その水や土地を数十年、さらには百年という単位で破壊してしまう放射能汚染は恐ろしいことです。

2011 年の数字ですが、フランスには 58 基の原子炉が 19 ヶ所の発電所で稼働しています。地図を見ていただければ一目瞭然ですが、フランス全土に万遍なく散在しています（下記の Web サイト参照）。パリに近いところでは、南東 105km、セーヌ河右岸に設計されたノジャン原発（原子炉 2 基）があります。英仏海峡に面したフラマンヴィル原発のように海に近いところだけでなく、ロワール河古城巡りの地シノン（4 基）、ボルドーからジロンド河上流 60km にあるル・ブライエ原発（4 基）、南フランスの観光地ニームに近いトリカスタン原発（4 基）、同じくローヌ河ほとりのクリュアス・メイス原発（4 基）など、観光地やワイン生産地と水源を同じくする原発が多いのです。万一事故が起これば、都市の水も、農業用水も汚染されてしまいます。日本の食料自給率が 39%（日本農林水産省が示す平成 22 年度カロリーベースの数字）であるのに対して、フランスは 111%の農業大国です。農業ができなくなるフランスは悲劇です。

ミリー・ラ・フォレにも、近くの村や町にも桜が咲いていました。美しい自然がいつまでも美しいままであってほしいと思います。

<http://fr.wikipedia.org/wiki/Fichier:Nuclear power plants map France-fr 2.svg>